2003. 6. 28

第2回 利水部会検討会への意見

川上 聰

1. 水需要管理への転換の基本を再確認

(1) 環境用水の確保

人の生活環境(のみ)から生態系あっての人の生存環境との認識へ

(2) 入るを図って(測って)、出するを制す

2. 地球温暖化について

(1) 温暖化による降水量変化の判断は未だ諸説あり定説を得られない状況から提言に述べた順応的対応が至当。

(2) 近年の渇水傾向が強調されているが10～30年のスパンで地球レベルの気候変化を論ずるのは疑問

3. 今後の社会変化について

(1) 第2稿の「近年の少子高齢化社会の到来や人口増の緩和等…」の人口構成の変化や人口動態予測は甘すぎる。

○ 2030年頃をピークとして後100年で日本の人口は6000万人程度まで急激に減少するというのが、どのような予測方式によっても明らかになっている。

mri 三菱総合研究所

- 水供給と水需要のバランスを、今後の社会変化と併せて30年、50年、100年のスパンで考えるのが「国家百年の計」

4. 財政運営について

- これまでのような大規模な水資源確保施設を造り続け子孫にツケを残すことは避けなければならない。

- 次世代人材（技術者）に仕事を託そう。

5 都市用水の節減

- 都市中心区域（オフィス街など）の中水利用に向けて街区を指定して浄化施設を設け循環利用を図る。
- 道路敷の地下を有効利用
  - 都心道路敷下の大規模駐車場の例
  - 下水道の合流→分流化政策の実施に併せて実行
  - 雨水貯留施設も。

論談みえ

公共事業の頓挫検証を

川上ダム政策変更

小児科医
平井 誠一氏(51)

えっ。何だって。「川上ダム見直しへ」との朝刊見出しに舞いた。淀川水系流域委員会が、「河川の生態系や生物多様性に重大な悪影響を及ぼしている」などの理由で、「計画・工事中のものを含め、ダムは原則として建設しない」と答申。建設中の川上ダムも対象で、その後、激しい議論になっている。

もう4年前になるが、私は水没予定で移転が進む青山町の川上地区を訪ね、一文を書いたことがある。

記憶をたどり、かつてお参りした寺へと向かった。途中目にする何軒かは、住み人なく、屋敷には草が伸び、視界をさえぎられるほどだ。玄関の柱に張られた何枚ものお札だけが残されている。もう一つの橋を渡り、左へ登った所に変わらぬ姿でお寺はあったが、戸が閉められており移転先の案内紙が張られていた。

再び川辺をゆっくり歩いていると、「写真を撮りに来たのか」と、一人の老人に声をかけられた。少し話した後、「長年住み慣れた所を離れるのは大変ですね」と言うと、「国のやることですから」と、それだけを言い、つえに両手を添え、遠くを見やるようにいくぶん視線を上げた。国家事業には国民として最終的には協力すべきだとのニュアンスなのか、いくら反対したところで個人の主張など国家権力の前には結局無力だというものなのか、真意は計り知れなかった。「国のやることですから」との言葉を反芻しながら歩いていると、無人家屋の板塀に、「日本を立て直す、政策のプロ集団」と書かれた、色あせた政党ポスターが、張られたままになっていた。

川上ダムは97年から旧建設省による予備調査が開始され、92年より建設事業に着手。すでに約450億円が投入されている。

53年の台風13号や59年の伊勢湾台風による出水を契機に、洪水調節や都市用水確保などを目的に木津川上流に六つのダムが計画された。

その一つの川上ダムだが、地域を二分する対立があり、20年以上もかかって最終合意。国のため、下流域の人々のためにぜひと言われ、それをよりどころに決断し、故郷を捨ての移転を受け入れた。

ダムの環境への悪影響は、計画当時も分かっていたことであり、反対派の主張でもあった。用水需要は時代により変わるだろうし、洪水の危険は30年前も今も変わっていると思えない。ダム中止に反対しているのではない。今になって環境保全のために中止という、当時の思いいたらぬ政策決定に不信を抱く。

すでに巨費を投じながら、頓挫している公共事業は少なくない。そうした公共事業は、計画立案のどこに問題があったのかを検証し、調査結果を公表すべきである。また各種政策を策定し、答申する委員会も一定の結果責任を負うべきだと思えてならない。